（二）　あんこうとなかま

①

道頓堀、いまの日本橋の南詰にわたくしの子方筋の家があって、北詰に船仲間のヤドがあったから、父が少年のころによく川越しに船仲間の仕事をみたものだという。川辺の家だからシタヤ（地階）が部屋になっていて、船がつくと揃いの装束をつけた仲仕がまめに立ちはたらいていた。いつか知らぬまにこれがなくなっていたというのは、恐らくすべての古い生活と同じことで、橋の袂の一軒の仲間部屋が消えたところで、注意してふりかえる人はなかったわけである。おぼろな記憶を辿ると明治二十年ころだったという。

つぎは母の話で、生家の筋向いが飛脚屋であって、町家の雑用はもとより商家の売り捌き、仕入れまでに便利がられたこの商売、やはり明治二十年ころには影がうすくなっていたという。これは堺市の話であった。

陸海ともどもに交通文化上の一大転換がこのころにあって、その末路がどうなったかという問題とともに、何とかして古い制度を記憶しておきたいものである。

明治三十年ころに築港の大改修工事がおこなわれて、ここに請負をしたのがこの界隈の大親分酒庄組であったが、配下に臨時の労務者が多数あつめられた。それとともに海運にトンで勘定せられる大船がつかわれ、いままでのように河を遡航しえず、荷役運搬のすがたは一変してしまった。安治川岸にあった大小多くの船仲間や倉庫仲仕が、みな築港へきてあたらしいオキ仲仕へと転向した。酒庄組の番頭であった中谷庄之助氏も中谷組としてオキ仲仕の仲間をつくった。いくつかの組ができ、そしてまた瀬戸内海のはきだめのような大阪湾口に臨時の仕

事をまつ浮浪人が、そのうち十数年間に世間がこまるほどあつまってきた。ここで仕事は小船の荷役運搬からまったく一変して、大船の船内作業を主とする沖仲仕、それから陸上にも大工場の併立にともうて多くの臨時労力を必要とし、オカ仲仕その他の雑役が一つの職業として成立するようになった。

仕事と職名はこうして変ったが、彼等の組織と制度、その底にもちつたえる心意は変ることができなかった。のりうつるべきあたらしいものが用意されなかったために、幸か不幸かわれわれには無限に興味ある民俗の宝庫をいまもつたえていてくれる。つまり船仲間から脱皮したのが仲仕仲間の制度である。またはきだめのように湾口にあつまった臨時人夫は、これをあんこうといい、そのなかでも仲間の制度とおりにしたのが部屋あんこうとよばれる一群で、残余の浮浪者が立ちあんこうというものである。

②

仲間というのは古い名前であって、親分子分の関係と部屋の制度をもつのを特色とするようだ。土工の仲間、香具師の仲間などと、根本において変りはない。ここで仲間ということばについてのべると、ナカマはきまった施主をもっていてこれをみだすことができない。すなわち縄張りである。施主からいうと何某はうちのナカマだという、このときは何某という親分が施主のナカマになる意味で、この親分はうちのナカマというといっさいの子分、道具番をまでふくめた意味をもっている。縄張りをあらすと他の組と争いになるのみでなく、施主からもおこってくる。

あんこうは一口に日傭労働者といわれるが疑問である。やはり寄場にあつまる町家の手伝、店による人足などはあんこうといわないようで、築港、市岡を中心にした一円にたむろする本船仲仕、倉庫仲仕、オカおよびオキ仲仕、雑役などできまった施主をもたず労務供給業者につれてゆかれるのがあんこうである。ところがこの名前

も全国の一小部分のよび名であるらしく、「大阪のあんこう、江戸の立ちん坊」という句が、ちょうど「所かわれば品かわる」といった意味にいわれるとおり、全国で種々のよび名があるが、たいていは何々人夫といい、たまに軽子だの経子だのという（神奈川）理解しにくい名前もあるが、あんこうというふしぎな名前はほかにはないようだ（あんこう名義解）。

魚の鮟鱇が大口をあいて、流れくる餌をじっとまっているのになぞらえたという説がまことしやかにいわれている。一応もっともな説であったが、わたくしはこれを古い親分にたずねてみたところ、ご存知なかった。いまあんこうとよんでいる労務者ができたのは、この親分の記憶にうすれるほど遠い話ではないのだから、これはきっと何かあんこうという名前が以前からあって引きついだのだとおもう。そのために、日傭労働者をあんこうとよぶ地域のひろがり、あんこうという魚が実際はどのような魚か、あんこうという他のものをさすことばについて調査をしなくてはならない。

別に安く雇われるから安雇だという説が最近いわれている。いまものしり連のいう語義解はその二つしかききえないが、彼等の社会みずからはなにも語るところがない。ただ奇妙なのは世間がこの名前がいかんからとて最近名称をかえたのに、みずからはあんこうとよばれて不快でも腹立ちそうな顔もしない。たんに生活にくたびれたからではなく、その名前についての別な感じがないだろうか。ちなみに発音はあんこうでなくあんこである。

③

ナカマの定型は、親分が店をもっている。この下に小頭があり、これが部屋をもっている。小頭が子分、つまりヒラナカマを十人くらいずつもっていて、これが部屋に起臥する。ヒラナカマでも世帯をもつと二階借りをし、一戸をかまえた者はかならず部屋をもっている。親分の店には番頭、監督（これは仕事の監督ではなく人間の監

督である）がいて仕事はここが元うけとなり、小頭はたんに平ナカマをつれて仕事にでて、セキニンとなって差配するだけで、給金も平ナカマめいめいが店でもらうから小頭にはアタマがはれない。このほかモトウケのナカマというのがある。

あんこう部屋というのは元ウケのナカマと同様の組織であるが、ここには仲間特有のしきたりはない。つまりジンギやチカヅキ、喧嘩の仲裁式というものがない。で組織は部屋にオヤヂがあり、この下に番頭一人、小頭が若い衆十人に一人くらいの割合、若い衆というのは部屋あんこうのことで二階の部屋に起臥する。この組織は料理方や三助の部屋と大差はないようだ。この会でも杉浦さんの米つき部屋があった。

立ちあんこうについては前稿を参照ねがいたい。また民俗としてとりたてるほどのものはない。

組織の話のついでにいうと、平仲間から小頭になるのには三年かかる。それで「小頭ボーシかぶるのに三年」といい、帽子をかぶると実に仕事がうまくこれで一人前である。ことに沖の仕事は三年はせぬと一人前の熟練はえられなかった。親分がみこんで監督と相談をしてきめたので、そうでなくては帽子はかぶれなかった。部屋あんこうでも、現場で気にいる人、若い衆の模範になる人、三年で小頭になり世帯をもつようになると支店長として部屋をわける、これをモトベヤに対してシモベヤという。またそのなかから番頭もたてる。

④

あんこうおよびナカマの組織のなかで、おなじ昔からもちつたえた伝承でもそこに特殊なもの、仲仕や雑役労働者のあいだのみに発生して伝承されているものと、他のナカマや日傭労働者やさらに遊民というべき集団のなかの伝承と共通したものとのみわけをつけることが、民俗学の一つの課題としてこの調査のもつ意味があるかと思う。ここでは金銭を中心にした生活のいくつかをたんに並べて参考にしたい。

（ヂョーヨの給分）

ショーマイをわる　一日分の勘定を施主からつけてもらうことである。寺に納める米、床屋にわたす金とおなじショーマイということばに興をもった。一人一日の労働単位をクというのは、他の大工、手伝にも共通している。何々倉庫は今日は七ク半などと番頭が帳面につける。クにたいする給金の定額は単価というが、このほかにウケトリ、坪トリ、ヤリジマイなどの仕事のしかたがある。

デズラ　実際にもらう給金のこと、単価はオカ仲仕は十時間（部屋によって十二時間）、オキ仲仕は日の出から日没までのいわゆる税関時間であり、時間外作業にブがつく。三交替を二交替にすると二分、夜勤が三分つく。つまり十二時間作業では単価の十二割である。夜どおしするトオシ（オキではオールナイ）、翌日までつづけるオヒトオシなどがある。

アシマシ　またはサカテ　よい働き人が配下からトンボせぬために相場以上の給金をはらう、この金は質の低いものの分からまわってくるので、親分の才量であったが、単価とアタマがきまってくるとどうしてもマンボーで加減をしなくてはならない。

マンボー　一口にいえば賞与だが意味はすこしちがう。賞与のようにして直接金でわたすものであり、たとえば時間のこりのときブの代りにその日一日のブとして個人にわたしてしまう（したがってブは勘定日までオヤヂのあずかりだが、マンボーはその日にわたしアタマがない）。また定期の仕事（何時までという時間きりの仕事）でも、えらい仕事にはだす。だすのがつかい上手なわけで、カタ（肩で運搬する仕事）にはたいていだしている。またマンボーをオヤヂにまとめてわたすときは、オヤヂがその日の若い衆のはたらき（みなくてもよくしっている）によって配分し、これを責任（一作業場にゆくときの責任者で小頭、または小頭なきときは古参の順）に示

してその夜に本人に分配する。

ブマシ　前記の時間マワシのほかに仕事によるブマシがある。硫酸、石膏、セメント、石炭の荷役にだされる（ウケトリ類似の仕事のしかた）。

ヤリジマイ　五時までの仕事を四時にしあげたときヤリジマイだというと五時までの金をだす。しかしヤリジマイでなく仕事がなくなったときは契約がたとえ五時でも正味の時間分しかださない。

千枚瓦上ゲ　間掘り、坪トリなどすべてウケトリの特殊な作業にたいするよびかたである。

（金融の方法）

その日の金はその日につかうこの社会では、労働の給金よりも結局金融によって日々がくらせてゆく。

カンジョー　月の一日に前月分をオヤヂがわたす。デズラからカシキンとアタマと飯代を引いてわたす、この金はよくあって翌日になくなってしまう。

ナカカシ　月の十六日、月の上半分の八分をこの日にだす。

カシキンをわる　その日の小遣いの前貸をうける、小遣いをワラヂ銭という。

カリコミ　弱いナカマをおどして金を借りる法、地雷也といわれる。すこし金をもっているとこれにあい、いったんみこまれると無一文になるまで借りる。

バクチ　だれだれが困っているからバクチをしようじゃないかといい、テラ銭をその人にわたす救済法、いまはないが、香具師ナカマのような奉加帳の制度はまだきいていない。

エンムスビ　兄弟分または親子の縁むすびを金策のためにおこなうことがある、兄イカブは人からは金を借りられないが、弟分から借りにくると断れない。

オトコダテ　よく人に金を貸す男で、もちろんナカマにいばるがよく人の世話もする、また借金をするのも自慢の一つで、俺も借金のできる顔になったとよろこぶ。

その他ドロボー（ヌグという）、質屋かよい（コロスという）などもたいせつな金策方法である。

⑤

わたくしの調査がこれからナカマの調査へとうつる順序なので、民俗学上おもしろい領域は実はこれからしらべて報告したいので、まだほんの上部だけしかみていない、それについてはこれを門口の報告として、どんな問題をしらべねばならぬかを共同で考えてご援助を願いたく思う。自分の職業にしている問題がさきになってこの方面の十分な資料を報告しえなかったことを気がねしているのである。

本稿　大阪民俗談話会会報　九号（昭和十五年九月五日発行）　掲載。

（三）　日傭労働者調査手記

(一)あんこう寄場の風景など

①

ことのおこりはこうであった。

はじめ古代日本人の道徳感をみようという窮屈な目的で勉強していたわたくしは、いつかしらぬ間に、昔をながらえさした社会そのものの生活に、かぎりない興味をおぼえるようになっていた。神道と国史とを専攻にした書生生活のなんともいえないやるせなさから、ほんとうに救われたのは折口博士の「ごろつきの話」をよんだときであった。代々職人のしつけやかましい家に育ったわたくしは、そうした社会みずからの道義のなかに学問の課題をもみいだしうるということは、身にしみてうれしかったし、学問のみちにも救われたというほっとした安らかさをおぼえた。

それが病みつきでもう四、五年にもなるいま、年にいくつかずつの「土地をもたぬ人たちの生活」をしらべつづけるうち、いつしか窮屈なめどをもつたびゆきも、ひろがっていた。学問は定義ではない、しょせんは行動である、そして親分子分の社会のなかに生きながらえた古代日本人の道徳感も、はてはこの国の政治教育のめどになり、またその社会が古きをつたえねば生存しえないところに、寄子たるものの救わるべき自然の条理がある。

世相を文献からながめた窮屈な史学者には、どうしても解きえぬ最後のなぞは、大阪のみにも四千五百人はいるという純粋の浮浪日傭人を、将来はどうするかという問題であろう。歴史は回顧であってはならない。未来の疑いを解きうるための民族の生活である、とこのようなことをも考えるようになった。

古い制度と気分は遠慮もなくほろびてゆく。時勢のすみずみに歩調をあわせえない制度のかなしさである。だのに、これにかわるべきあたらしい制度は、たえて久しく生れようとはしなかった。政策の間隙につけこむ悪党がはびこり、時の虚しい制度を悪用しても、いたしかたのないことである。見聞くものはすべて異国の歴史と制度であった維新以来のこの国の学問のわびしさが、われわれのこころを無上にさびしくした。さて日本の社会政策、社会事業を、日本経済学、日本法律学のまねをして樹立しようという、あさはかな論者の思いつきがいまあったところで、素材を何に求めてよいのか。民族のなぞを解きうるものは民族みずからの経験である。永く他郷の人としてすておいた社会の感覚、親分子分の情誼とその制度の機能をよそにして何の対策があろう。日本資本主義の特殊な発達は、庶民の困窮をも労力の配賦をも特殊の色にいろどった。だが困窮したのは日本人であり、わるくいわれながらも政策を弥縫して労力配賦につくしてきたのも過去の日本の親分であった。いまただちにこの制度をなくすれば、困るのはわれわれではなくて、社会であるとは、たんなる親分の矜恃のみではなかったと思う。

この大きな疑問は、十年も二十年もまえに、すでに先覚の論じたところをいまもなおわたくしが提出しかつ回答をおくればせながら、みずからあたえねばならぬことかもしれない。

わるくいいつつもあきらめられぬ点に、時勢を指導するものの弱みがある。それもこの制度自体をわきまえず、永続の必然性を意識しない近眼論者の悲哀であった。好まぬものならなくしてしまうがよろしい。さてなくして

どうしようというのか。あとにくるすべての準備、その準備のための事実の把握さえ、いまはまだなされていない。中間搾取を限度づけたのもよい、労働賃金を規制したのもよい。しかもひとたび失敗すれば、どうにもならぬあんこうが途上に充ちることまでは考えおよばなかったのだろう。わたくしはみずからの疑問にこたえるべく、この調査を計画したのであった。そしていま心うごいて、まず手じかな日傭労働者の問題を古いノートから摘記してみようと思いたったのである。

②

順序を逆に、一番の最近の印象ふかい「あんこう寄場」の第一印象に話をはじめよう。

今度の調査でわたくしの重い尻をあげさしてくれたのは協調会の井上正雄さんと、疾うからこの問題に別のほうから注意しておられたアチック・ミウゼアムの宮本常一さんであった。

そしてまず第一に、親分子分の社会を民俗学的な方向から話をきいてみようとは、かねがねののぞみでありまた宮内さんの家にはいるまで考えていたところであった。しかしまず朝の寄場の風景を一度みてから話をきいてもらいましょうと、港の功労者中谷庄之助さんのおことばのとおり、わたくしにとってまったく未知の世界、おどろくべき情景を、ひと眼みるや否や、いままで永く心にいだいていたわたくしの学的自覚は、はかないことだがすっかり失われてしまった。調査者としての態度も、民俗採集家としての心ばえも、わたくしの心から頭からすっかり抜けでて、いやに漠然とした鈍重な感じが、ずっしりと頭におおいかぶさってくるのをおぼえた。詩人でないわたくしの第一印象としては、これだけしかいえない。

話をきく時間のわりには、わたくしのノートはほぼ一冊をうずめつくし、手も顔も真黒にほこりにまみれて帰宅するや、速記の翻訳をするよりさきに、あのずっしりとおもい第一印象をむしろ社会事業界のなかにしらして

おく義務をおぼえた。労働事情、民俗事実はいずれ一部ずつにまとめるつもりで、この散漫な一文をつづった理由はここにある。おそらく、平然とあの寄場の風景をながめた経験をもつ人にとっては、わたくしのうわずった感情、あまりにも血の気の多い小供っぽい感想録などは何の刺激にもなるまいことを承知しながら。

③

その晩（昭和十五年六月十三日）、宮内登良衛さんの肝いりで日親組のあんこう部屋にとめてもらったわたくしは、あくる朝うつらうつらのうちに二人三人とおきだしては洗面し食事をし、十分おきぐらいに小頭につれられて一組ずつその日の仕事にでかけてゆくもの音をきいた。弁当箱や風呂敷の、そんな世話まで小頭は注意ぶかくしている。昨日めずらしいことにトビコミが二人もあった。そのシンマイのあんこうの世話である。いつも小頭のやすむという部屋を占領してしまっていたわたくしの部屋の、しきりのからかみをそのときそっとあけて、宮内さんの三男坊が「そろそろでかけましょう」といってくださった。ちょうど六時半であった。

まったくの快晴だった、それだけにまた埃っぽくてもう顔も手も真黒によごれていた。

あんこうの寄場はいま二ヵ所ある。市岡はオカと若干のオキ、築港のはオキ専門の寄場である、状景はおなじことだが市岡のほうがみるのには適していると、宮内さんの前夜のお話で、日親組の部屋から十数町、ちょうど港区役所のまえにある市岡の寄場へとむかったのである。四百五十坪の空地を板塀でかこい、門に大きく「労務者新寄場」と書いてある。請負人につれられて十人、二十人と一かたまりになって門からでてくるもの、ぞろぞろと門にすいこまれてゆくもの、門のまえにとまっている一台のトラックには七、八人がつくもって乗っている、まだ二、三人たらぬのでもう一度かいにいったのだろう。

門をはいると半分ほどを柵でかこい、そのむこうがわにはところせまいまでに約三千人のあんこうが立っている。手合衆が高い机のうえからよびかけている、一声ょぶごとに四人、五人と柵をのりこえて、その手合のぐるりにあつまり紙片をもらっては請負人につれられてゆく。でしなに受付で帳面につけるのである。これだけがひとめでみた風景である。

反対の側のすみには、町のヨタもの然たるアニイカブが五人、七人と車座になって話している。これがレンラクをつかってドウをとり、労務賃銀の統制をみだしてはオヤヂをこまらせている連中である。一見柵内にいるのとはまったくタイプがちがって、赤ネクタイをしたり黒シャツ、半ズボンといったなりをしている。

ここの管理は青木繁治郎さんが事実上の責任である。短軀ではあるがキビキビした態度、その応容な風貌は昔の親分のなごりをどこかに思わせる。手合いの台のうえに立ち、メガホンを片手に、宮城遙拝と黙禱を号令される。大きくもない青木さんの声にもかかわらず、あんなにざわめいた行儀のわるかったあんこうたちが、いっせいに帽子をとり鉢巻をとり直立するのは、時局に対する認識とともに、短軀よく場を圧する親分の風格にもよっている。「いまは七時十分、今日は七時三十分でうちきる」といわれると、ふたたび手合いがはじまる。「中肩五人、三円八十銭、ないかッ」とよぶと、こちらではある請負人がいつのまにか、せっかくよせたあんこうをだれかにもってゆかれたという。顔がわからないものだから、あんこうもついちがった人にくっついていってしまうのである。また柵の内外では無断手合いをして勝手につれていってしまうのが、日に二百人ばかりはかならずあるという。次から次へ請負人がはいってきて手合衆にたのんでいる。「早く早く」と青木さんがたえずいい、「今日はとくべつうごかん」と子分のほうがたえずいう。

雑役の部のすみのほうのあんこうは、まったくの無表情で呆然とたっている。手合いが何といおうと、他のあんこうがどうごうといっさい無表情である。おおかた金の五十銭もにぎっていて、はじめから仕事にでる考

えはないのである。万が一、ボロイ仕事でもあればよい、なければすぐ新世界の映画館の割引時間中にはいればよい、昼ヤドにおれば十銭よけいにはらわねばならず、やはり日に一度はここのツチをふんで、同輩の顔をみねばやすらかでない、ふしぎな心にもよっていよう。

八時ころにもなると次第にうごかなくなる。アニイカブの一団ずつはしらぬまに消えている、たぶん築港のほうがよいというレンラクのシラセがあってドウをとってしまったのだろう。手合いは九時ころまでつづいた。最後にうごかぬあんこうは約四百人、かえりもせずに柵にもたれている。このときわたくしは場内に甘酒店、コーヒー店のだし店が四、五軒あるのに気がついた。うかつなようだが真黒にあつまったあんこうのうしろにかくれてみえなかったのだ。これらは別にばだいもとらず自由にやらせてある店である。

この最後にのこったものは、話しあっているのもあり、下をむいているのもあり、きょうびのことだから仕事のないわけでもあるまいに、なかにはでおくれたのもあろうが、いっさいあいかわらずの彼等の無表情のなかからは、何の彼等の感情をよみとることはできなかった。十時にはしめだしてしまうそうだ。ひとしきり話をきいてわたくしどもは門をでた。

④

それから築港の寄場へいったが、市岡の事情についていますこしくしるしておこう。ここは昨年十一月公認にしてうつしたので、それまでは境川に随意によっていたのである。柵内は四つにわけて雑役、デッチ引、中肩、上肩としている。

雑　役　掃除、その他運搬。

デッチ引　デッチ車を引く。

中　肩　十七、八貫までの荷物を肩にしてはこぶ。

上　肩　二十四、五貫の荷物をはこぶ。

この四つ以外の仕事もあり、たとえば大工、手伝いなどが少数ある。このように四つに立札をたててわけてはいるが、あんこうは区別もなくはいってくるからどうにもみわけられず、手合いがよぶとみこみもないものがよってくる。ひと眼で仕事と人間とをみわける才量がおそらく昔は手合衆に要求せられていたのだろう。万一あやまって仕事もできぬあんこうが、まぎれてやとわれていったときは、雇主の損であり、またいっしょにはたらくトモがよけいしなければならぬことになる。

あつまるあんこうの数は四月以来毎日の計数をみせてもらったが、統計数字の発表を制限されている今日、大ざっぱな数をかかげてみると、六月一日より十二日までの集合人員推算で一日平均二千五百人、供給人員千八百五十人、このほかに無断手合推算二百五十人で、結局四百人はあぶれたわけである。雨の日は大体七百人、ときには三百人位のこともあり、旗日はあつまる数は大体かわりがないが供給人員はすくなくなっている。そして一月ずつの変動、季節による変動も統計のすきなわたくしは無限の興味をひかれた問題であった。

四百人ばかりのあぶれるあんこうは、不景気のときならばいざしらず、今日ではみずからのこのみではなかろうかと思える。ただ需要の数が正確にはわからないが、まだ需要があるのに、最後まで無表情にうごかぬのが彼等である。うごきさえすればみさかいもなくつれていってしまうのである。金の三十銭か五十銭でももてば、なくなるまでははたらきたくない彼等である。よほどにボロイ仕事でもないかぎり、よいところをと思ううちに手合いがすんでしまう、それがシンマイのあんこうの正味の心ではないかと思う。そうしたきもちはとおりすがりのたび人たるわたくしに、たやすくしるべきかぎりではない。いや四年間あんこう部屋のオヤヂとして、親身に

なって世話をしていられる宮内さん自身が、どうしてもわからぬと述懐されたのがあんこうの心理である。

賃銀はその日の帳簿からひろうと、上肩単価五円—七円五十銭、中肩三円八十銭—四円五十銭、デッチ引三円五十銭、手伝二円七十銭、雑役二円二十銭—二円七十銭が標準のところである。しかし数字のみにとらわれる机上論者にはこうした額をしめすのは危険である。もちろんいまは請負人のアタマは一割にきめられ、何人中間にはいったところで一割の限度内で分配するのであるが、約四年間に倍になり先々月からすでに一割五分あがったこの賃銀も、いま四、五十銭もするスフいりの手袋が一日しかつかえず、一円八十銭の地下足袋が五日で穴があくということから引きあわして考えねばならないのである。寄場の管理は親分たちの、いまのことばでいえば無料奉仕である。朝の六時まえから管理にでてゆかれるところに、もうひとつ役人の仕事として期待しえない点があるようだ。

あんこうの私生活、労働生活についてはここにはしるさない。しるせるような簡単な問題ではない。しかしこれだけの労働力をどうにかならぬものかとは、話をききながら冷静さをとりもどしたわたくしの当然考えおよんだことであった。

⑤

ここですこしくナカマおよびあんこう部屋の「若い衆」についてのべておかねばならない。ナカマは昔ながらの制度であるとわたくしは思っている。組の下にいく人かの小頭があり、その下にヒラナカマ若干が一つの部屋をなしている。小頭はそのナカマをつれては毎日きまったところへ仕事にでるのである。そうした仕事にたいするワリコミとして、あんこう部屋の若い衆がある。ここの主人はオヤヂとよばれ、やはり小頭があって若い衆があり、毎日の仕事のつごうで七人もまとまってでかける仕事には小頭が差配についてゆくのである。親分子分の

かつての社会を統制した一つの労働の制度、大きなみうちをきりもりしてゆくオヤジの気苦労を別とすれば、寄場にあつまるほんとうの意味のあんこうはまったくちがった社会人でなければならぬ。彼等はおおむね二十銭ヤド、三十銭ヤドにとまり、朝は六時まえから寄場につめかけてくる。なかには弁当をもたずに仕事にくるといった、およそはたらく者の感覚と自覚とをとうの昔に失ってしまった人達がある。

自由労働者は概して行儀がわるいといわれながらも、仲間にはその社会のみに通用する仁義を固持している。これを崩壊にみちびいたあとの算段がまだできていない今日、よかれあしかれ親分子分の仁義のつながりは、労働を統制してゆくうえには必要なことであった。作業が分裂して、こまかいセシがやたらにふえると、いきおいナカマの制度は、より不安定なあんこうへとむかわざるをえない。セシのみをたいせつにし、寄子には自然に軽薄になるようなオヤヂが、たまたまできれば、労力の配賦はおのずから乱雑になってしまう。部屋に属するものほこりを、すくなくともこれにかわる新組織と新制度が完全にでそろうまでは、とりとめておきたいのが正味のわたくしの考えであった。

だが、この個人のわがままな考えようは、時勢のうごきには無縁である。任侠を根元としてみしらぬタビ人をかかえ、一見他人の心の底をもみとおす才量が、いつの世まですべての親分に期待できようか。いっぽうではただアタマをはる制度の弊害が叫ばれ、他方では悪辣なるモグリの引き手が跋扈するのは必然の運命である。これにたいする方策はいずれも消極的だ、隣家の塀からでた雑草の葉をむしりとってあんどしているようだ。

そして現実に九・一八ストップ令は一番の根柢たる生活源泉からあんこうの社会を動揺さしたのである。ナカマの単価はあがらぬが、日傭の単価には制限がないというた手落から、続々と転向するものがふえた。末世のかなしさにナカマにはもう義理も仁義もないのである。ただ月のうちより多く休み遊ぶ生活へとあこがれている。

さて強制的に労働せしめる方策がないかぎり日傭の単価を統制すれば、オカはとにかくオキはたちどころに困却してしまう。時間仕事である船内作業は、もし時間におくれると出帆をおくらせるか、もしくは積込み積だしをすませずに出帆しなくてはならぬから、この弱みをみすましたアニイカブのあんこうは、さきにものべたドウトリをやるのである。時間のぎりぎりまでは挺子でもうごかず、雇主がのぼせあがって単価をおもいきりせりあげたころにはじめてうごくというテである。これによって労賃の統制はたえずみだされているのが現状である。

こういえばあんこうはすべてナカマから転向したもののように誤解されては困るのだが、けっしてそうではない。みずからの心であぶれてしまうかのごとく錯覚をおこさせるような、最後までうごかぬあの無表情なあんこうは一体だれがつくったのだろう。

⑥

この議論はだいじな問題だが、解決のためにはさらにいくつかのくわしい実地の記録が必要であろうから、第一回の風景手記はこれでおえておきたい。

（六月十四日）

附記　この調査で見本にするようなよい報告書がないことはわたくしの一番困ったことであった。幸いに柳田国男先生の「都市と農村」、「明治大正史　世相篇」そのほかかず多い御著作からいろいろと学びえたことはうれしかった。調査にあたって非常な便宜をあたえてくださった、宮内登良衛さん、青木繁治郎さんにたいして、心より御礼を申しあげたい。

(二)　あんこう部屋の茶話会

①

むしあつい梅雨の空がおもくるしく覆いかぶさり、調査のために軽装をしていったわたくしも、向うへつくまでにじっくりと汗ばんでいた。日も暮れてから、おもわくどおりの小雨がいつしか本降りになってしまった。はじめてあったとき日親組の宮内登良衛さんから、月の一日には茶話会を致しますから是非ともおいでなさいと案内されていたものだから、わたくしは勝手しった日親組の事務所へ、一言挨拶しただけであがりこんで、ぐるりとみまわしていた。部屋の若い衆が次から次へと出入りしあるいはカシキン（前貸）をわってもらい、風呂銭をもらい、今日のマンボー（賞与）をもらい、目もまわるような忙しさのなかに、オヤヂも主婦も番頭もうごいていられる。心地よい忙しさである。明日の仕事に何人是非よこしてくれ、今日より四人多くたのみます、仕事はわたしの顔で信用してくれ、など次々と請負人が申し込みにくる。「今晩は茶話会します、皆様へ」と古参の若い衆が黒板にかきつける。わたくしはその日の若い衆の夕食と同じものでご馳走になった。

シモベヤ（支店）からも続ぞくとあつまり、ものの九時にも近いころ、モトベヤ（本店）には一ぱいに、約六十人もあつまった。部屋の形なりに変な車座になって、みなの顔がひと眼でみえるところにオヤヂさんとわたくしとはすわった。こうした外来の客にたいしては、部屋の若い衆はいたって義理がただしく行儀がよいのである。

部屋は六畳と八畳、事務所の二階で、押入れをぬいたなかにつねは二十人ばかりが起臥しているのである。

ここでわたくしが招かれた部屋の茶話会について説明しておこう。部屋をもつ組はこの界隈でも相当多いが、茶話会をもつのは日親組ばかりで、宮内さんがこころみてよいことだとつくづく思われたもの、毎月一回朔日に、部屋の若い衆全員をあつめてオヤヂさんを中心に話しかつよろこぶのである。費用は毎日のカシキンをわるときにかならず、一人一銭ずつ貯金をさせて番頭が預っておきこれを積立てて毎月一日に簡単な茶菓の会をひらくという。夜勤がまこと多ければ月の十五、六日にのばすこともある。この費用は菓子（この日はせんべいであった）が大約二十銭位で、幹事を立てていっさいの世話をさせるが、残余の積立金は現在八十円ほどになり、この

なかから負傷者の見舞金、出征勇士の餞別金を二円、三円と支出しているという、すぐれたる福利施設である。

茶話会の夜の話はまずオヤヂさんからの注文、朝の早起きを励行すること、衣類その他の所持品は下の押入れへかならず預けることなど、それから若い衆めいめいの注文、飯のこげたのを食わせたこと、工場の不平、番頭の起こしかたが悪いからその日は仕事を休んだことなど、そうしたなかに互にうちとけ、人と仕事の配合もオヤヂにおのずからわかってくる。ナカマのようにはっきりしたメーメ（目見え）の式を失った部屋では、こうしたあつまりでもなくてはオヤヂも若い衆も互に顔も心もしらず、いつしかトンボしたとゆうのがかなり多い。若い衆めいめいの心のままを表現したところに、大家族をきりまわしてゆくオヤヂと主婦の気苦労のし甲斐をみるわけである。親としての心、子としての気分のうちとける機会を、この茶話会はつくっているのであった。

うれしくてたまらぬように浮きうきしている人、またなかには笑いもせず無表情でいる人もある。この日のオヤヂさんの話は、去る六月二十六日統制せられた労務賃銀の詳細の説明と若干の注意事項であった。そのあとでとくにわたくしを皆に紹介してくだされた。

②

労働者にとって一番こまる問題は、しごと着だろう、はたしていまのままで働きやすいとみながあんどしているのだろうか、などがその日のわたくしの第一の疑問だった。宮内さんから何か話をすすめられ、そのようなことが頭にあったものだから、これを話して若い衆たちのめいめいの意見を境遇にてらしてのべてもらえれば、もっけの幸いだと思った。わたくしの話は、あとで考えてみれば、しょっちゅう頭のなかをゆききしている柳田先生の仕事着論の口まねのようなものだった。だが先生の「仮に各人が自分の境遇、風土と労作との実際に照らして、遠慮無く望むこと又困ることを表白し得るやうになつたとしたら、もう一度改めて斯ういふものゝ中から、

真に自由なる選択をして、末はめい〳〵の生活を改良する望みがあるからである」（明治大正史　世相篇　三四頁）とおっしゃったのをそのままに、実際にはたらいている人々の、かくしない意見と感想をきくことができたならば、世間のためにも幸いであろう。

それで若い衆たちの話を引きだすために、わたくしなどが何の酔興でこんな仕事をしているか。それは皆さんがめいめいの生活と労働をしやすくするために、自分で改良の方法を考えてもらうための補助をするのであること、今日はとくに仕事着の問題についてききたいことなどをのべ、仕事着の要件として、丈夫なこと、安価なこと、手軽なことなどを必要とすると話した。

③

これにたいする若い衆たちの意見はいろいろでたのであるが、そのうちの二、三をまとめて書いてみよう。

一　はきものについて

この仕事には地下足袋がもっともよい、現在これ以上のものは考えられない。二十年もみつけているが一番よいと思う。

第一に足が安全である。わらじだと指がでているから危険であり、ひところは草履をはいていると仕事中怪我をしても雇主はみとめず、薬代がとれなかった。ただし地下足袋も薄いものではいけない。

雨だと辷る点がすこし困る。ことにゴムがへると辷って困るがこのときは土つかずに縄切れを二つまいておくと辷らない。

五、六年まえまでは雑役は半ズボンに靴下、地下足袋に一定していた。地下足袋がだんだんなくなったものだから、その他の服装まで次第に変っていった。

配給の不足と値段の高いことは一時の現象かもしらぬが、何とかならぬだろうか。ひところ六〇銭位、上等で九十五銭のものがいまは公定一円二十六銭で、古のものが二円はしている。それでも一ヵ月はもつから他のものよりは非常によい。

二　ズボンについて

地下足袋がすくなくなってから、半ズボンに靴下姿もなくなり、長ズボンになってしまった。これではまったくお祭り衣裳で、晴天の日はまだよいが、雨のときは長ズボンの裾がぬれて歩くのさえ困難である。夏冬なく半ズボンがよいと思う。動作がしやすくなり、工場内の雑役しごとでは靴下も不用だろう。外部の仕事でも靴下さえ穿けば危険は伴わない。第一格好もよくなる。

三　上着について

上はジャンバーがよいと思う。手首がしまるからよいと思う。いまよく背広などまえを割ったものを着ているが、腕がまくれて作業ができない。ハッピよりもたしかによいとおもう。

夏はジャンバーだと汗が袖口にたまるからいけない。夏はハッピのほうがよい。昔は半袖などはなかった。

五円位のジャンバーを買っても三日で破れてしまう。布地を改良してほしい。

その他の一般的な意見は、仕事の単価は過日統制せられたが装束の単価も統制してほしいということであった。いまの問題としては食物を別とすれば、作業衣は彼等の労働のためには実に大きな負担なのである。これの価格の手ぬるい統制、闇の横行は、衣質や格好よりも一番労務者をはたらきにくくしているのである。もう一つは、やはりナカマの仕事着がよいということであった。

総じてオカの仕事には危険がすくない。かりに鉢巻をしてもしなくても、鍛冶職のように仕事の具合が変るものでなし、また帽子を冠っても冠らなくても、オキ仕事のようにはたいして危険さのちがいはない。ただの常着のようにだらりとせぬかぎりはどうでもよかったということが、そもそも乱雑のはじめであった。ミシンで大量生産するいわゆる国防色のズボンが、うっかり股をひろげると、ピリリといってしまうようなものでも、もう昔の装束職人の五年、十年としこみからたたきあげ、より糸のつかいわけまでしてくれた縫いの技術を、この都市では期待しえなくなったいま、我慢して穿かねばならぬのもしれきっている。これはタチあんこうの話だが、弁当も持たずに仕事にでたりするくらいの、作業にたいする無自覚は、ただ定規の時間を作業場でついやし、できるかぎりは上手に油をうればよい彼等には、カタアテもなしに二十貫、三十貫のものを肩にして運ぶこともある。当然にシャツは破れ、いかに頑健な彼等の皮膚も肉体も、終日の労働にたえうべくもない状態が起らぬのがむしろ不思議である。そして中途でケツをわるあんこうが、六千人のなかには毎日けっしてすくなくはなかろう。ただ仕事着に結びつけて、ここまで考えるのはわたくしの考えすぎである。だがわたくしの結論としていまの仕事着はけっして十分ではないということだ。不用意のあいだに昔の装束を忘れてしまい、これにかわるあたらしいものは絶えて久しくあらわれなかったのである。

④

いまではハッピは一つの晴れ着である。だいたい昔から多くの人があつまって、一つの仕事をするような機会は晴れの場であり、人はみな何となしに晴れがましい気分に浮きたったのである。専門の作業者の出現、ことに近代都市産業が一世を風靡するにいたっては、晴と褻との区別は失われた。大工の装束が、ハッピが晴れ着の要素を失いたんなる仕事着になったとき、一人二人の風流なる棟梁は、革ハンテンや絹ハンテンを発明したのであ

る。この堕落は着る人の心をも混乱させている。一つの部屋で与えられた印ハンテンを、つい着たままでトンボすればタチあんこうになったのが何々組の印ハンテンを着ている。オヤヂがみつければその場で脱がせてしまおうが、シャツも何もないハッピ一枚のタチあんこうでは、まさかにそれもできなくて、ひどいのは組の小頭ハンテンをどこでヌイだか（盗む）平気で着ているようになる。こうなれば親分のしきいで切るあの仁義の法式に、まえかがみに小腰をかたむけても、とりつぎの子分が背中の紋を一眼みたところで、組も身内も判断はできまい。

古さは失われた。そしてすこしも便利になったのではない。

あのハッピをもう一度晴れ着に復活させたい。こうした希望があるにはある。日親組の部屋でこの四月にちいさな慰労の旅行をするつもりで、そろいのハッピ六十着を注文したところが、桜も藤も散りかつしぼんだ五月の末にできてきた。そろいの衣裳でくりだしたときの壮観さ、ただ部屋をもつオヤヂのみが味わう真実のうれしさも、木綿の品不足で夢と化した。しかしあきらめられぬ宮内さんは、この八月一日には全員くりだそうと、それまでにもう二十着を注文したという。

こうした話のきれぎれに何かしら教えられるところは実に多かった。

⑤

木綿がない、スフが弱いといういわば一時の現象を問わないとしても、オカ仲仕の仕事着は一般に荒れている。人の百人もおいているオヤヂとしては、またこれが一番気にかかるのである。「オヤヂがまさか洗濯もできません」と語られる。店さきにきたない服装でゆききされると第一に組のかおにかかわるという。いまではあまりきたないのもないようだが、蒲団のよごれは一度洗濯しても一ヵ月とはもたない。わけもわからずに頭をコテコテ

にチックでかためるのにはほんとうに困ったもので、「彼等にもやはりやつす気があるのですな」と述懐せられる。部屋に住まうものは、しかし割合にさっぱりしている。

その点タチあんこうになると雲泥の差であって、部屋の若い衆もひとたびトンボすれば直ちに服装をおとすのがつねである。トンボして二、三日はいわゆる悪友の所持金をたよりにするが、それもなくなれば、今度は俺の装束をコロそう（入質）、六一のオヂさんにたのんで、ついにコロした装束を浮かすこともならず、着のみ着のままのなりで金チャブの腹をかかえてタチあんこうにでるのがつねであり、数ヵ月はこうした悲惨なドヤ住いに、昔をなつかしみ結局はなれた部屋にもどってくるのである。部屋ものの所持品はただ装束と常着があるのみ、あるいは下の押入れに預けて番頭が管理している、部屋におけば最後、すぐにぬがれてしまう（盗難）ので、この泥棒ばかりはどうにも取り締りができないのである。

さてオカの装束は荒んでいるが、オキ仲仕はそんなわけにはいかなかった。すなわち仕事の点にすでに装束までを律する大きなちがいがあるのである。

第一は帽子、帽子を大事にすることは格別である。もちろんオカでも小頭にはいまはやりの戦闘帽型に小頭とまえに書いたものがあるが、オキには小頭ボーシとヒラナカマのボーシとがはっきりとあり、形は以前から学生帽の型で、小頭ボーシには一本筋をまく。ボーシがなければ作業が危険であり、ヅクでも落ちれば頭に大怪我をすることになる。帽子を大事にすることは、たとえば小頭になることを「小頭ボーシかぶるのに三年」というごときである。

第二は手袋、もちろん軍手でありオカにも必要だが、オキの仕事には、いま四、五十銭するものがまる一日しかもたないのである。しかも五本別々のものでなくては役にたたない。地下足袋もオキでは五日もはくと底はと

にかくとして上の布が破れてしまい、草履では海上の動作はまったく不可能である、これは組合の野々田さんの話であった。

⑥

このあとで二、三の若い衆のかたに過去の思いで話をいくつかきかせてもらった。旅から旅にわたり歩いた人、タチあんこうになったときの気持、北海道の炭坑での生活など興はつきず、夜の十一時ころに会はおわったのである。わたくしはほっとしたような、そのくせこのようにうれしいあつまりはいままで一度だってもったことのない妙な昂奮のなかに、その夜は例の日親組の小頭部屋にとめてもらったのだ。（会は昭和十五年七月一日にひらく、七月三日記）

本稿　社会事業論叢　第一巻第四号、第五号（昭和十五年七月二十日発行）掲載。

（四）　日傭労働者調査のその後

（1）

あんこう調査に熱中した昨夏このかた、この仲間の制度や組織は一変したといってもよいくらい、厚生施設も次第にそなわり、国の大事な人的資源としての役割を充分に果させるように整備されつつある。昨日、今日の新聞でみても、改善の企ては相ついでなされ、わたくしのしらべたのが古きなごりを伝える最後の一頁であったことを、今にしてつくづく思いみる。しかもそのなかに、物心ともに矛盾せず日傭労働の組織がととのえられるかといえば、いかに外部の制度が定規と重箱でおしつめたようにしても、なお古い精神としきたりとが働くものみずからの心のひと隅にぬけきらぬかぎり、疑問である。すべての社会現象のなかに、もっとも美しく進んだがごとき外面の皮を一枚めくれば、数十百年以前の生活気分が存在している。あたかもわれわれの羊毛の洋服を脱げばお灸の痕跡がみつかるように。この例にもれず、国の統制が強力に加えられても、その力が強いほど、あんこうの組織のなかにひそむ前代の遺存心意がより強い力をもつわけである。

だから時間的にはその以前であって、思考の上ではその後にくる問題を、ここに述べてみたい。これがわれわれ社会事業史を究めようとするものの、一つのつとめともなろうことを、今にして深くみとめたい下心もあるからである。そしてわたくしのあんこうの弁にことよせて、朝鮮社会事業誌に一つのお礼をいいたい点も含まれているのである。

（2）

日傭労働者を大阪であんこうと呼ぶ名義については、「（一）社会事業理論への示唆」に、漁業労働者の網子（あんこ）からでたのではないかという仮説を示しておいた。ところがその後、あんこうの所得のなかで臨時に貰う賞与にも似たものをマンボウと呼ぶと発表するや（本論集Ⅱ　十一　附録（二）「あんこうとなかま」）、このマンボウは実は魚名であって、漁師が沖でこの魚をとると陸へもあがらず沖で処分をしてしまうものであることを沢田四郎作博士その他二、三の辱知のかたがたから教えられ、してみれば所得のマンボウも、その日の労働を終えてのかえりに余分に貰う金であるところから、宿へは持ちかえらず途中で泡盛にでも費してしまうもの、それが魚のマンボウの処分のしかたといかにもよく一致しているところから、漁村を故郷にもつ彼らの一員がふと冗談にでもいい出したのが起りであろうと推察するにいたった。これからさらに類推してあんこうなる名義にしても魚名の鮟鱇と結びつける古来の説が、あながち民間語源なりとして葬りさりえず、今度出版する小著「あんこうの話」*には、その序文にすこしの改訂をしておいた。

＊この小著の出版については不明（松野）。

ところがその後、秋田県男鹿半島の吉田三郎氏の報告に、その農村でいうあんこうの意味が二、三列記されているのをみた。すなわち、

（一）貧乏所帯の一人娘にもらったモゴ（婿）のこと。

（二）一般年期奉公、いわゆる年雇人のこと。

（三）何か祝儀とかその他人の集りの場合に、大人が男の若者たちに対する呼び方。

の三用例があり、吉田氏が附記せられたその語の心理には、封建的な主従関係としての絶対服従、隷属観と、その行為を強制するにあり、村の集合労働に大人は若年の男に対して「このアンコ共、俺らどご休めてんがばら（お前ら）うんと仕事せ」と、大人の倍も仕事をさせると附記していられる（アチック・マンスリー　第三〇号）。この報告をもうすこしさきにみていたならば、わたくしは今すこしく「あんこうの話」をまとめることに躊躇したろうと思う。こうした地方に遺存する言葉の発見によって、われわれが都会のせまい知識に大きな省察の機会をあたえられたことは、一再にもとどまらなかったからである。地方の事例をしらず、わが近辺の見聞のみを天地と考えたあいだは、盲人不怯蛇でどんなことでもいえるわけであると、自己の速断を羞らう。

あんこうなる用語が探せば地方にまだ他の用例があり、それを総合して一つのすぢみちをつくれば、おのずからその真意が明かになろうかと、わたくしのこの字義のせんさくをなおつづけたいと思っている。それとあわせて考うべきは日傭労働者の地方名がどうであるかの問題である。人夫とか働き手とかいう辞典にもでているような近代の標準語を別にして、東京・横浜などのカルコや北海道のタコなどという、世俗な普通名詞が実はわれわれの興味をそそるのである。なぜならそうした名称は多く彼ら自身あるいは彼らと同じ程度の教養しかもたぬ仲間が、面白半分にいいだしたものであり、そこに民衆の興味と物の考え方、感じ方があらわれているからである。そして土地とちの日傭労働者のすこしずつの内容のずれも、おのずからそこに含れてくるのである。大阪市社会部の「日傭労働者問題」には、軽子は横浜でいう日傭労働者の普通名詞であるかのごとく信ぜさせるが、文学士平山敏治郎氏の談では、東京で運搬の雇人であり月給制の奉公人であると教えられた。北海道のタコ人夫は、真赤な腰巻をしてうろうろしているからの名であると、少年時つねにその働くさまを眺めて暮された真崎幸治氏から書信があったが、これらの命名技術の極めて幼稚なることは、けっして教養ある傍観者の命名ではなかった

ことを暗示している。

なにゆえにわたくしが夢中になって「あんこう名義解」のせんさくに時を費すか。それは「(一)社会事業理論への示唆」にもすこしくふれたとおり、日傭労働者の発生を考えるいとぐちが、もしやそのなかから引きだしうるのではあるまいかとの希望からであった。しかし今はまだこの国の社会史が、それを解決にみちびくにたる資料の所在を明かにしていない。だからこそ、日傭労働者が各地思いおもいに発生し組織化し、あんこうなる名義がどこかで生れて果ては秋田の一半島にまで伝播し、一脈の関連あるかのごとき用例を現存することが、学問の対象として無限に興味をそそり立てるのである。

(3)

大阪における日傭労働者の発生は、明治中期にさかのぼる。明治三十年ころに築港の大改修工事がおこなわれ、この請負をしたのが界隈の大親分酒庄組であって、配下に臨時の労務者が多数あつめられた。

同じころ、日本海運業界に大変革がもたらされ、従前安治川を遡航してその沿岸の船仲間の労働に依存していた荷役が、噸で勘定せられる大船を運送に使うや、荷役のすがたは一変せざるをえなくなった。そして河岸の船仲間や倉庫仲仕の面々は、みな築港へあつまりきたってあらたなるオキ仲仕に転向したのである。この仲間は親分子分の制度をつたえるもので、この変化はただ世間のうごきにそうた表面だけのものであった。ここで仲間の制度について注を加えると、(一)親分の縄張りをもつこと、すなわち一定の施主があってその他の仕事はしないのである。(二)古風な仁義をもつこと。(三)所得が日給制であるが、たとえば半端仕事などで一定の額に達しないときには親分がそれを補塡するなど。こうした制度を特徴としてもつのである。

同じころ、改修工事などに動員された莫大な量の労働者に加えて、瀬戸内海のはきだめのような位置にあった大阪湾口に臨時のしごとを待つ手に職なき浮浪人が、その後十年間に世間が困るほどあつまってきた。なかには九州地方沿海の民が、都会の川舟生活者として集ったものもあった。その余のたんにたむろしているというにすぎぬ群衆に、なにかの職のふりつけをしたのが、実は仲間の親分、もしくは部屋のオヤヂだったのである。この事実は功罪いずれにせよ、日本の社会史上に忘れえぬ問題である。親分子分の心意の伝承によって、わが労働事情の一つの波は切りぬけえたからである。

同じころ、陸上には大工場が併立し、多くの臨時の労力が安価に要求せられた。労務調節の安全弁を労働者自身に転化しても慣おりをあらわさぬような安価な労働力を、親分の配下やオヤヂの部屋のものなどにもとめた。それらを支柱にして多くの産業は発達したのであった。

(4)

かく動員され、かく再編成された浮浪人なるものは一体なんであったか。何時、何処から大阪へ流れはいってきたものであろうか。これには幾段かの過程があった。

第一は明治中期、地租改正を直接の動因とする地方の出稼ぎ貧農である。この問題はこれまでに相当に論ぜられたところである。

第二は維新後約十年、この期間は士族処置の問題が表面にあらわれていたが、同じく旧幕時代に特殊な地位にあった庶民のなかで、再組織せられねばたってゆけぬ群れがあった。本稿に関係のあるのでは、以前ごろつきといわれた都市の遊民、奴(やっこ)といわれた城下町の半抱え人などである。町人と大名に寄食していたこれらの群れは、

封建制の撤廃と同時に大阪のごとき大都市に流れこんだのである。そこにはまたこれを擁して新たに彼らの生活を保証しうるような特定の親分がいたわけである。大阪私設社会事業の早き一人の創始者たる俠客小林佐兵衛の授産場や、神戸では関浦清次郎の百人部屋のごときは、一方からは批難もせられるが、やむなき存在であった。それほどにわが社会事業の完備がおくれていたのである。しかも昔は必然の存在であった多くの子分をかかえた親分の多くは、伝統の情誼をまだ消さずして保っていたから、失職した子分のふりつけに随分と苦慮したのである。前記二名の俠客はこれをいわゆる日本的な慈善事業にまで変形してしまったが、東京、大阪には、江戸、浪華の町奴の本流亜流が数多くゆき迷った子分を抱いていた。ことに真正直で度量の宏い親分のところへは、もとは定住もせず浮浪していた地方のごろつきが「親分さん、たのみます」といって集り、そういわるれば自分は困っても生活を保証してやるのが彼らの仁義であったから、都市はさながら職なきものの集合場の観を呈した（この部分の史実については古くから奴人足の元締をしていられた鈴木勇太郎翁の談による）。

第三は大阪の貧民窟、名護町の成立史実によって示される時代である。幕末、名護町に公許の旅人宿を設け、地方からの出稼ぎ力役者を三十株の木賃宿に泊らせたが、ついに西国巡礼、乞食などが集り、さらに無頼の悪漢兇児が定着しはじめたというのである。もとは出稼ぎの力役者たる米搗、油絞、酒造の職人の宿であったといえば、大阪島之内から高津にかけて多くあった職人部屋の一種であったわけだ。今日のあんこう部屋の制度もその末流であるが、部屋のオヤヂはやはり宿泊の世話のほかに職のふりつけをもおこなっていたのである。それはわたくしの家の近くにも風呂の三助や料理職人の部屋があって、幼時屈強の若い衆がごろごろしていたのを記憶している。そうした部屋が時勢と地理の強制によっては、あの暗黒街のごとき貧民館へと辿るのも不思議ではないのである。小判をくわえて路に餓死し、糠を食ってフクという病気にかかったと伝える幕末のできごとだったか

らである（フクというのは糠食にて身体が水ぶくれになって死ぬ、それにつけた民間の病名である。この部分の史実について出稼ぎ職人と部屋制度、部屋より木賃宿への変遷を説くべきであるが、今は鈴木梅四郎の大阪名護町貧民窟視察記の参照を望んでおく）。

以上都市浮浪人発生の縁起を概観して感ずることは、一つは貧農の移動定着であるが、今一つはもとから土地に依存せざる民の存在である。この後者は今までの社会史が多くみおとしてきた問題であって、わたくしは久しき以前から詩のような一つの仮説をたてている。

中世の日本には土地をもたず土地に定着せぬ多くの山の民がいた。彼らは特定の宗教をもち農耕以外の山の産物に依存する生活をつづけ、山から山へと渡り歩いた。そうした人たちが国の動乱時代にだんだん平地におりてきて庶民と交渉したのが、古書にみえるスッパ、ラッパであった。そして徳川の治世になると不定なる生活は次第に緊縛せられ、もとから保有していた信仰と情誼によって都市を中心とする親分子分の制度を成立せしめたのである。しかも浮浪せる山の民の定着は、幾百年の永きにわたりいろんな形をもってつづけられた。

無籍者とされていた山窩の一族ずつが、明治以後のこの国の戸籍に登録されてきたということはおおかた世間にしられている。そのような過程をもって山の民が国の常民として新たにみとめ編入されてきたのは、戦国の世から由比正雪の乱におわる短い期間の史実ではなく、明治を経て大正にいたるもつづいたのである。そしてその末流の多くが今の都市浮浪民、都市貧民のうちに伍したのであることを考えてみなくてはならぬ。

わたくしはここに遡って日本社会史を究めたく、日本職人史の研究に着手したのはあたかも一昔の以前であった。当時にたてた仮説はいまだに仮説のままである。しかも文献の記述にたよらず、牛のあゆみでもよい、わたくしはこの二つの眼でみ、この昂奮しやすい心で感じうることのほかは、史実として採って自己の体系に組入れ

るに躊躇するのである。あんこうの調査もそうした潔癖心から余暇の許すかぎりはみずから調査し、わが心を昂奮させてわずかずつの解明へとたどっている。

（5）

その時、わが朝鮮社会事業は一つの有効な史実を恵投してくだされた。すなわち本誌上に昨年末から連載されている京城帝大医学部特殊細民調査会の「土幕民の生活・衛生―生活調査」である（本誌第十八巻第十二号　第十九巻第一・二号未完）。

〃京城府に於ては如何なる人口集中過程を取つたか。朝鮮に於ては、その産業的発達が日本内地より遅れてゐる結果、凡ゆる現象が、後者程尖鋭的にあらはれてゐないことは勿論断るまでもない。〃

とかいてあるこの原理が、わたくしどものとりうる方法上の原理である。勿論土地の事情と生活の伝統がちがうのであるから、単に発達がおくれているからとて、いま土幕民の辿りつつある情態が、往年の大阪の事情に適合するわけではない。それを規定するのは朝鮮特有のあらゆる条件であることは明白である。しかしわたくしの注目したいのは、一つの民族がいかにして都市に集りきたりかつ定着の過程をたどるかの、生きた実例を眼前にみせてくれたという点である。それが都市貧民成立史の具体例として、事実にもとづいて社会事業史を書こうというわたくしの方法についての一つの示唆を与えられたる喜びをもつゆえんである。土地の人には四六時中眼にふれていることであるから別段物珍しくもなく、今度の調査でも眼目は〃為めにする所ありて〃のことであろうが、わたくしども局外者にとっては、調査者が偶然に筆をとったつけ足りのようなことが面白いのである。

内地においてはこうした過程をすでに過ぎさり、あらためて社会科学の眼から眺め直そうとしたときには、ひ

ととおり事態がおちついたあとだった。そして彼らが未だ浮浪して、都市生活者になんの利害関係も与えないあいだはまったくの異境の人としていた。ためにどれだけこの国の社会史が損をしているかわからないのである。〃為めに物言う〃ことも必要であるが、百年の計はまに合わせの物いいから生れるものではない。不用なるかのごとき多くの隻言が積り積ってこの国の社会のありさまを明かにするのである。それをやれば効果は期してまつべき問題が朝鮮にはあるわけである。

本稿「朝鮮社会事業」第十九巻第六号（昭和十六年六月号）掲載。